

参考資料

分類名〔畑・特用作物〕

## 参 5

## ロックロップヘッダーを活用した大豆収穫

宮城県古川農業試験場

## 要約

大豆収穫作業においてロックロップヘッダーを活用すると刈り高がリールヘッダーよりも 10 cm 程度低く、コンバイン収量はリールヘッダーより 10%程度多い。

普及対象：大豆を栽培する土地利用型経営体  
普及想定地域：県内全域

## 1 取り上げた理由

普通型コンバイン用アタッチメント「ロックロップヘッダー」は、リールヘッダーに替えてコンバインに取り付けることで条刈りが可能で、刈り高が低く、大豆の収穫ロス軽減が期待される。今回、ロックロップヘッダーとリールヘッダーの収穫作業を比較したので、参考資料とする。

## 2 参考資料

- (1) コンバイン収量はロックロップヘッダーが 374kg/10a、リールヘッダーは 336kg/10a で、ロックロップヘッダーの方が、収穫ロスが少ないため 10%程度多い（図 1）。
- (2) コンバインの刈り高はロックロップヘッダーが 5.4 cm、リールヘッダーが 15.1 cmで、ロックロップヘッダーの方が 10 cm程度低い（図 2、6）。

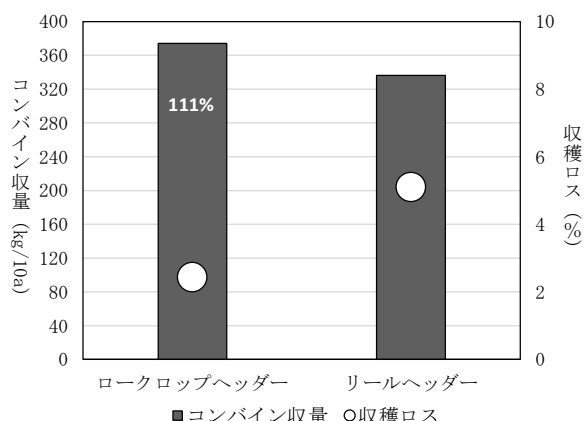


図 1 コンバイン収量と収穫ロス（令和 6～7 年）

注 1）令和 6 年と令和 7 年の平均値。

注 2）コンバイン収量は水分 15%に換算した。グラフの百分比は「リールヘッダー」に対する「ロックロップヘッダー」収量比を示す。

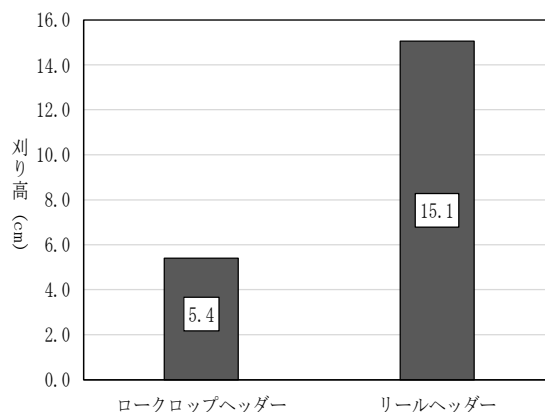


図 2 刈り高の違い（令和 6～7 年）

注 1）令和 6 年と令和 7 年の平均値。

注 2）刈り高はコンバイン収穫後の刈り残した主茎の地表からの長さ。

## 3 利活用の留意点

- (1) ロックロップヘッダーは 2 畦と 4 畦タイプがあり、いずれも豆類を高精度に刈り取り、ヘッドロスを削減することが可能で、倒伏時には、大豆を引き起こして収穫作業が可能である（図 3）。
- (2) 本試験は大豆「ミヤギシロメ」を用いて古川農業試験場内ほ場で行った。今回、YH1170 用 4 畦ロックロップヘッダー（ユニット：CRC4、1170、プラットフォーム：CRC1170、PF）と YH1170 用ワイドヘッダー（QWSJ）を普通型コンバイン（YH1170）に取り付けて収穫作業を行った（図 4、5）。
- (3) YH1170 用 4 畦ロックロップヘッダーの販売価格は 411.4 万円（税込み）（令和 8 年 1 月 16

## 参考資料5 ロークロップヘッダーを活用した大豆収穫

日現在「ユニット：CRC4、1170、プラットフォーム：CRC1170、PF」の販売価格）である。

- (4) ロークロップヘッダーの対応条間は 60～69 cmで、使用に際して播種条間を本県慣行の条間 75 cmよりも狭める必要がある。条間 65 cmの場合はロークロップヘッダーを 65 cm、条間 70 cmの場合は 69 cmに調整することで収穫作業を行うことが可能である。
- (5) 栽培条間がロークロップヘッダーの対応条間ではない場合や 15 cm以上の高畝の場合は収穫困難になることがある。
- (6) 汚粒の原因にもなることから、大豆の茎水分が十分に低下してから適期に収穫を実施する。

(問い合わせ先：宮城県古川農業試験場 作物栽培部 電話 0229-26-5108)

### 4 背景となった主要な試験研究の概要

- (1) 試験研究課題名及び研究期間

普通型コンバイン用アタッチメント「ロークロップヘッダー」を活用した大豆品種「ミヤギシロメ」栽培体系の確立（令和6～7年度）

- (2) 参考データ



図3 4畦ロークロップヘッダー  
(メーカー提供画像)

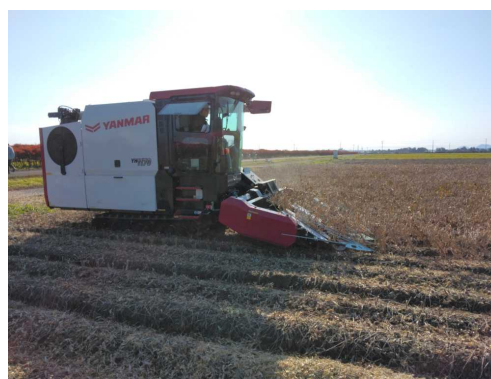


図4 ロークロップヘッダーによる収穫  
(令和6年11月)

注1) 使用機体は普通型コンバイン YH1170、アタッチメントは YH1170 用 4 畦ロークロップヘッダー



図5 リールヘッダーによる収穫  
(令和6年11月)

注1) 使用機体は普通型コンバイン YH1170、アタッチメントは YH1170 用ワイドヘッダー



図6 ロークロップヘッダーの地際での様子

- (3) 発表論文等  
なし

- (4) 共同研究機関

新稲作研究会（委託元）、ヤンマーアグリジャパン株式会社（機械提供）